

優秀賞

— 中学生以下の部 —

「私史上最高の本『姑獲鳥の夏』」

増岡瑠璃さん

推し本:『姑獲鳥の夏』

著:京極夏彦

推したい相手: 普通のミステリーとは一味違う物を
読みたい人

「私史上最高の本『姑獲鳥の夏』」 増岡瑠璃

「この世には不思議なことなど何もないのだよ、関口君」『姑獲鳥の夏』は、古本屋にして憑き物落としの陰陽師、京極堂とその彼と旧知の仲である小説家、関口巽が会う、奇妙で不可解な事件を憑き物落とし、京極堂が解き明かしていくという作品です。今回は、密室から失踪した夫と、二十ヶ月も身籠ったままの妻というなんとも奇怪な夫婦の憑き物を落とし、夫の失踪事件の解決と妻の謎めいた妊娠の真相を明かすという物語です。最初の一文は、この京極堂の口癖、座右の銘と作中で語られている名台詞です。私も、この一文なくして京極堂は語れないと思っている一文です。私が、この作品が気に入っている理由が二つあります。一つ目は、普段の生活でも時々起こりうることが捻りをきかせた話のスパイスとして登場するところです。例えば、あなたは今、鉛筆を探して机の前に来たとしましょう。しかし、机の上は、定規、読みかけの小説、冬休みの宿題などがあって中々鉛筆が見当たりません。様々なところを探してもう一度その机を見ると小説の隣に鉛筆がおいてあったのです。この時点で分かりづらい人のために条件を一つ追加しましょう。小説のカバーの色と鉛筆の色は一緒でした。そうするとなんとなくわかってきたのではないのでしょうか。鉛筆は最初から机の上に置いてあり、あなたの目には見えていました。しかし、「今、鉛筆はどこにあるかわからない」と強く認識していたので、机の上の鉛筆を知覚しておらず見えていなかったのです。スマホを持ってスマホを探していることと同じですね。実際に私も普段よく探しものをするときに経験しています。皆さんも一度はあると思います。このような日常あるあるを最高に複雑にして、恐ろしくしてみせるところに盲点を突かれたような気持ちになり、気づいて読み返したときは鳥肌が立つほど、とても大きな感動と、衝撃を受けました。二つ目は、どんなに信じられないようなことも、この世の理で説明がついてしまうところです。かと言って、その説明が日常あるあるで片付けられるのかと言われるとそうではなく作品の設定の下で、成り立っていますが、そのメリハリも味の一つで好きなのですが、今回は別の味を味わって欲しいと思います。例えば、入れ替

わり殺人事件のトリックのミソといえば、人と人が入れ替わっているところではないのでしょうか。このように、トリックのミソと言えるところが、妖怪や呪いと言ってしまうようなことでも、そうではなく人間の仕組みなことなのだ、説明がつくことを証明するところが、馬が走り抜けるような疾走感に溢れ、怒涛の伏線回収は、謎解きに加速度と緊張感をつけてより一層美しさを増し、解決へと着地するところが読んでいて非常に楽しくスッキリします。以上が私の好きなポイントでした。最後に、私がなぜこの作品を推したいかという、私が読んできたミステリ作品の中で最も謎解きパートに躍動感があると感じたからです。謎解きパートと言えばミステリ作品の中で最も盛り上がる山場ですが、多くはトリックの秀逸さや、犯人を追い詰める探偵役の立ち回りを大いに魅せると思いますが、『姑獲鳥の夏』はさらに、文字で、読者に臨場感を感じさせて楽しませてくれます。初めて見るような漢字、単語、熟字訓、言葉を使い熟して場面のリアルな雰囲気を描き、まるで自分もその現場にいて、京極堂の憑き物落としを目の前で、本のキャラクターと共に見届けているような感覚にさせてくれると一番、物語に入り込むことができた作品だったからです。私は、この感覚を多くの人に味わって欲しいと思い、この作品を選びました。きっと作品を読み終えた後に、もう一度京極堂のあの一文、「この世には不思議なことなど何もないのだよ、関口君」振り返ると始めとは、また違った風に聞こえるかもしれませんね。